



## 富士の見える棚田…

### 西伊豆・松崎

浜田 豊

(昭和45年 政治経済学部卒)

棚田のことを知るまでは、家の草花は育てても本格的な農作業とは全く無縁だった。しかし、ある講演会で浜松医大の先生から言われた…「定年になって趣味を持とうとしても、それは身に付きません！」

確かにそれまで私は仕事一辺倒だった。仕事は特殊なカメラを作ったり、多くの分野から高速度撮影を引き受けるといった興味深い内容だったから別に趣味が無くても不足は感じなかった。しかし…その講演を聴いてからハタと考えてしまった。そして暫くして、「これからは体験したことが無い事にトライしてみよう！」と考えるに至った。

ある日、新聞に棚田オーナー募集の記事が載っていた。そうだ、農作業は全く経験が無いから打って付けの話だ。それに伊豆は海があり山もあり、温暖で温泉もあるから別の楽しみ方ができるかも知れない。

しかし時既に遅く、そう決心した時はとっくに締め切りを過ぎていた。「何とか入れてくれ！」…私は町役場に直接電話した。幸いにも担当者は理解ある人だったので、望み通りオーナーに加えてもらうことができた。いつものゴリ押しだった。

その棚田は西伊豆、松崎町の石部（いしぶ）という集落にある。松崎から更に南へ下った二つ目の入り江の、風光明媚な半農半漁の集落。この辺の海は真水のように透き通っていて、本当に綺麗だ。きっと鉄道が無いことで、観光客が少ないからだろう。オーナーは年単位の契約で、田植えと稲刈りには参加義務がある。それ以外の出入りは自由で、言わば労力提供のボランティアである。地元民の高齢化で棚田を再生・維持できなくなったことが、オーナー制度の大きな理由だった。



石部の入り江から眺めた富士

さて、松崎は意外に遠い所である。下田か三島からバスに乗り、更に松崎から別のバスに乗り換える。便数も少ない。このように足の便が悪いので、私たちはいつも自宅から車で行く。ワゴン車に長靴やバケツ、着替えなどを積み込んで東名高速を走る。私の運転はゆっくりなので、最初に休憩する鮎沢までは保谷から2時間も掛かる。いつもは妻と一緒に行くけれど、時々息子や兄弟、友人も助太刀してくれる。田植えも稲刈りも昼までには現地に着かなければならないから、保谷出発はいつも6時と決っている。

鮎沢でゆっくり朝ごはんを食べて再び走り出し、裾野インターで下りてから三島へ向う。そして三嶋大社を左に見てからは、国道136号線をまっすぐ松崎へ向う。

途中は伊豆中央道という短い有料道路を通過。更に湯ヶ野、湯ヶ島への分岐を過ぎると、道は船原峠までどんどん登って行く。かなりの急勾配だ。天城山も近く、周りの山々が迫ってくる。峠を過ぎると今度は急勾配の下りになる。運転に神経が集中する。

そして道が平坦になると海が見え、土肥の町に入る。土肥金山があった風光明媚な景勝地だ。土肥グランドホテル明治館を過ぎる頃には到着時間が殆ど読めるほど道はスムーズだ。恋人岬を過ぎ、宇久須、安良里、田子の漁港を過ぎるとまもなく堂ヶ島温泉。奇怪な岩が立ち並ぶ景観に、大きなホテルが続いている。堂ヶ島を過ぎると松崎町。



「はるばる来ました松崎に！」…  
保谷を出てから6時間…私の安全運転でやっと到着した。しかし…とは言っても石部は更に南下しなければならない。そして宿の前に車を置いてからは、エッチラコッチラと山登りが待っている。棚田は山の中腹にあるからだ。海拔ゼロm…とは、よく言ったものだ！真に海から登るのだから…。

### 棚田から眺めた駿河湾

思いがけず現地までの道案内をしてしまったが、棚田から眺める駿河湾の景色は本当に素晴らしい。時折海から風が吹き上げてきて、正に爽快そのものである。



田植えと稲刈りはオーナーや助っ人が日を決めて集まる共同作業。小さな子供たちも参加して大賑わいだ。地元の婦人会の皆さんも炊き出しに参加して、お昼やおやつを振舞ってくれる。海を眺めながらの休憩は、何とも言えない幸福感に満ち溢れている。

田植えの時期は、鳥のさえずりやかえるの合唱、そして水車の回るゴットンゴットンという音が耳に優しい。水路にはクレソンが一面に自生し、山には落やあしたぼが群生している。田植えは比較的短時間で終わるので、二日目は大体が山菜採りになる。昔の山道を登って、勝手知ったる群生地ですり採る！ そして車に積んでお土産にしている。



しかし稲刈りは一転して大変な作業になる。田植えの三倍の労力は必要だ。稲を刈って束ねて縛り、一箇所に稲束を運んで、そして天日干しするため横に渡した竹竿にそれを掛ける。これが稲刈りの一連の作業である。私は何時もちんたら作業しているから、「一体いつになったら終わるのやら…」である。慣れないといつもこんな調子だ。しかし年々慣れるに従って、担当の田んぼが二枚、三枚と増えてくるから結局重労働になる。



妻や助っ人さんと冗談を言いながら、お隣さんとも話をしながらの作業は新鮮でとても楽しい。終わった後の爽やかな気持ちは、何にも代え難いから不思議なものである。

一連の作業が終わると宿へ戻り、温泉で汗を流して帰路に就くことになるが、天気や気分でもう一泊することもある。定宿となっている民宿はお馴染みさんで、食事の質・量共に半端でないから時々これでいいのかと心配になることもある。

2003年（平成15年）から始めた農作業のまねごと、早いもので2017年（平成29年）には15年目となった。56歳の時から通い始めた西伊豆松崎…地元の人達とも顔見知りになったが、遠地ということや家庭での時間配分もあり、ここ四年はオーナーから一歩引いてトラスト会員として現地棚田再生の後方支援を続けている。（2017.6.25）